

椎名亮輔

Ryosuke Shina

FREDERIC MOMPOU

A la recerca de la sonoritat silenciosa

静寂しじまの調しらべを求めて
フエデリコ・モポウ



寡黙で、控え目で、
しかし魅力に満ちた音詩

スペインの「ピアノの詩人」待望の本格評伝

地中海、カタルーニャ、フランス、ピアノ、そして、「再び始めること」——
えもいわれぬ音世界の背景にあるものとは

音楽之友社

ハ
社

グラナドス・マーシャル音楽院へ見学に行ったときに、モンポウ関連の資料が自宅にあるから、と誘ってくれたのである。

ピソのドアが開いて私を迎えてくれたのは、白い小さな子犬だった。その子犬を抱えてトーラさんは、二人のアシスタントが資料整理をしている部屋や、博士課程の学生が研究をしている机を案内してくれたうえで、私に居間にあるソファの向こう側に座るように促し、さまざまな資料を奥から出してくれた。モンポウがラローチャ女史の結婚時に贈った《前奏曲》の自筆譜、ラローチャが作曲者自身と練習したときに使用した（鉛筆でさまざまな指示の書かれた）《内密な印象》の楽譜、さらにはその練習の様子を録音したCDまで。

そして、そのような資料に混じって一通の手紙を彼女は私に見せた。モンポウが一九三四年に、当時の音楽院院長であったフランク・マーシャルに宛てて書いた、以下のようなものである。

一九三四年一月二十五日パリにて

親愛なるマーシャル、

私たちの友人であるリカルド・ビニエスが財政的に非常に困難な状況にあり、私たちは彼のために何かしようということになりました。つまり、彼の旅費（彼は現在ブエノスアイレスにいます）を



モンポウとアリシア・デ・ラローチャ。モンポウは1950年6月、彼女の結婚のお祝いにと《前奏曲》第11番を捧げている（提供：Axix Alicia de Larrocha）